

◆年頭挨拶◆

理事長

山下 静也



新年、明けましておめでとーいございます

新型コロナウイルス感染症も5年が経過し、2024年5月からはインフルエンザと同じ5類感染症扱いとなっておりますが、未だに感染者は出ていて、入院患者さんもおられます。海外からの旅行者も爆発的に増え、コロナ前の活気が戻っていますが、病院の患者数はコロナ前には戻っていません。万、2022年2月に始まったウクライナ・ロシア戦争には北朝鮮が参戦し、第三次世界大戦の懸念に加え、2023年10月に始まったガザ地区でパレスチナとイスラエルの戦闘は未だに続いており、平和が舊かされる時代となつています。戦争へ全世界への影響は甚大で、燃料費を含め物価が世界中で高騰しています。明るい話題といえ、MLBの大谷翔平選手が名門ドジャースに移籍し、右肘の手術のリハビリ中でもあるにもかかわらず、打者専念のDHで大活躍し、前代未聞のホームラン50号・盗塁50個を達成し、ナ・リーグMVPを満票で取ったことは日本人として喜ばしい限りです。

当センターの手術室は6室で、満杯で新たな手術患者を受け入れづらい環境にありましたが、その解消のためハイブリッド手術室を増設しました。また、2023年12月からダヴィンチを使ったロボット手術を導入し、特に前立腺癌、消化器癌等を中心により精緻な手術が可能となり、大動脈狭窄症に対するTAVIも開始予定です。大変喜ばしいことに、アメリカを代表する週刊誌「Newsweek」の「World's Best Hospitals 2024」日本版にて当センターが2年連続で選出されました。最近では全国から初期研修希望者が集まり、泉州のある研修病院となりましたが、更に医師を充実させ、泉州地域住民の皆様の生命を守る最後の砦としての役割を担っていきます。今後も皆様方のお力添えを何卒宜しくお願い申し上げます。

◆年頭挨拶◆

副病院長

種村 匡弘



新年あけましておめでとーいございます。謹んで新春のお慶びを申し上げます。

令和7年、新年を無事迎えることができ、「新春万福」の良い年になることを心よりお祈り申し上げます。

さて、超高齢者社会を迎えた日本の医療は大きな課題に直面しております。近年、医療の高度化・先進化・個別化が急速に進み、医療現場の負担は増大の一途をたどっています。にもかかわらず、「医師の働き方改革」によって労働時間の削減を迫られる矛盾した状況が発生し、当院を含めた医療現場は混乱をきたしています。この問題を解決するためには「人から人へのタスクシフト」ではなく、生成AIや医療用ロボットなどを的確に取り入れた未来型医療のビジョン構築・策定を行い、抜本的な医療改革を断行することが医療破綻回避の唯一の解決策であると考えています。「人からAIやロボットへのタスクシフト」による医療の効率化を図ることで、「時間と心のゆとりを取り戻した心温まる真の医療」をもたらし効果が期待できます。さらに、多くの人が経験している病院外来受診での長い待ち時間によるストレスの軽減や人的ミスによる健康被害の削減にもつながると考えています。

当然ながら、医療のAI化・デジタル化にはコストがかかります。そのコストを誰が負担するのかも議論する必要があります。導入コストを各医療機関自身が負担することになれば、経済的負担による更なる病院経営の圧迫、さらにはAI化・デジタル化の導入がほとんど遅滞してしまう恐れがあります。医療のAI

化・デジタル化は、国民の健康維持、質の高い医療の提供、地域による医療格差の解消などの視点に立てば、国の根幹に関わる大きな問題として、国主導のAI化・デジタル化の推進が望まれるところで。今年度は「年（みどりとへびどし）です。へび」と言いますが、しばしば嫌われ者扱いをされがちですが、一方で、脱皮を繰り返して成長することや、その生命力の強さから、「再生」「復活」「長寿」の象徴として縁起が良い生き物とされています。当センターは「アナログ医療」という古い皮を脱ぎ捨て、AI化・デジタル化で未来につながる医療センターを目指して一致団結して取り組む所存です。

2025年は「巳（美）」を結ぶ充実の年となるよう頑張つて参ります。本年もどうぞ宜しくお願ひ申し上げます。

◆年頭挨拶◆

病院長

松岡 哲也



旧年中は、方ならぬご厚情を賜り、心からお礼申し上げます。

（兼）副理事長
昨年は、日本国内外ともに混沌とした不安定な一年でした。国内からは、元日から能登半島地震が発生しました。当院からもDMAT隊を派遣し、成田危機管理室長は統括DMATとして長期にわたり医療支援に従事しました。その能登半島では9月に豪雨に見舞われ、能登半島の方々にとっては散々な一年となりました。被災された皆様には心からお見舞い申し上げます。我々も今一度災害時の備えを強化する必要があります。

国外に目を向けると、ウクライナ戦争やパレスチナ紛争も収束の兆しは見えず、加えてシリアでは反政府勢力がアサド政権を打倒しましたが、容易に平穏を取り戻せるとは思われな状況です。欧米諸国では、トランプ大統領の再選、ドイツやフランスでも右翼政党の躍進、韓国での尹大統領による非常厳戒の発令など、世界情勢がどのように展開するか見通せないカオス状態です。我が国の政界でも、自民党の裏金問題により岸田内閣が総辞職し、衆議院選挙で野党逆転状態となりました。

日本の医療情勢も、昨年の診療報酬の改定では真水部分は88%のプラス改訂と言われていますが、そのほとんどが医療従事者のベテラティブ評価料であり、病院収益のプラスには寄与しません。逆に、光熱費の高騰や物価高に加えて、新たな治療法における薬剤費や材料費の増加により、過去最高の稼働額を達成しながら、収益率は低下して厳しい病院経営を強いられています。

◆年頭挨拶◆

副病院長

井出 由起子



謹んで新春のお慶びを申し上げます。

（兼）理事 看護局長
コロナ禍の空白を取り戻すかのように動き出した社会の中で、皆様におかれましては平穏な日常が戻られていますことをお願いいたします。とは言え昨年度も波乱の一年であったことは間違いありません。容赦なく発生する災害の猛威に人間がどこまで備えられるか、力を試されているように感じます。

そのような中、日々進歩している治療は選択肢が多様となっております。我々医療者は治療の意思決定を行うための十分な説明が重要であると考えています。納得して治療を受けて頂く環境調整を実現するために、昨年度は治療とケアのすき間を埋めることのできるしくみの構築に取り組みしました。特に従来から存在する看護外来に加えて11月より開設となった「医療とケアの相談外来」では、治療とケア内容を理解した上で希望する療養生活が送れるよう、患者様・家族様の心情・価値観に寄り添い、医療チームとの橋渡しを行つていきたいと思っております。

また急性期病院としての役割を果たすために、限られた病床を有効に活用していくための入院後支援を含めた病床管理においても工夫を致しました。医師の治療を最適なタイミングと環境で提供するためにも、この調整は重要なポジションであると感じています。いずれも病院職員が一丸となり、地域の皆様により良い医療とケアを提供できるよう、一歩ずつでも前進できることを目指して努力する一年にしたいと思っております。

そのような中であつても、りんくう総合医療センターは泉州南部地域唯一の高度急性期病院として、皆さんの期待に応えられる質の高い医療提供を継続していく所存です。

今年度は、当センターが主体となって泉州南部地域に地域医療連携推進法人（泉州南メデイカルネットワーク）を設立し、地域完結医療介護システムの確立を目指します。

MyHero (マイヒーロー)

本号の共通テーマは、「マイヒーロー」ということですが、私にとってヒーローと言える存在は思い浮かびません。私が平素より自分自身あるいは組織運営に対する戒めとして心に刻んでいる現象に「動的平衡 (dynamic equilibrium)」があります。これは、生化学者ルドルフ・シェンハイマー氏が提唱した現象で、日本では分子生物学者の福岡伸一氏が紹介して広まった概念です。生命という個体は常に同じ形態を保って平衡状態にありますが、実際は絶えざる分解と合成を繰り返している（動的）状態にあります。そして、その動きが止まった時点でその生命は死にゆく存在です。組織もまた同様であり、改革を繰り返して始めて現状を維持できるので、改革を辞めた時点でその組織は衰退に向かいます。更なる発展を遂げるためには、一層の変革に努めなければならないということだと、自分を戒めています。本年もご支援のほど、宜しく申し上げます。

MyHero (マイヒーロー)

幼少期のマイヒーローは、「アタックNo.1の粘原こずえ」でした。彼女の美しい容姿に憧れたことはもちろんのこと、バレーボールというチームスポーツから展開される人間模様や努力することの美しさに惹かれていたように思います。私はきっとこの辺りから、チームから生み出される力をいかに最大にするかというマネジメントに魅力を感じていたと振り返ります。チームにはヒーローも必要ですが、ヒーロー以外の存在はもっと大切であり、それらを含めてチームが力を発揮することをたくさん経験しました。みんながヒーローになれる組織でありたいものです。

